

講演録

日本人と中国人

日中関係は
“異母兄弟”の関係



東京外国語大学教授

中嶋 嶺 雄

私は、これからの国際社会が、非常に個性的な動きをしていくのではないかと考えております。各国での機械化が進み、情報システムが高度化すればするほど、他面において、国際関係は個性的な動きが強くなると思います。

私の専門とする中国問題についても、中国が持っている民族的な癖を十分理解しておくことが大切だと思います。そうしませんと、いくら日本と中国が親密な関係にあるといっても、情報ギャップ、認識のギャップが起き、ひいては様々な摩擦を起こしかねない、ということになるからです。

距離をおいたお付き合い

中国にはもともと様々な学問がありますが、政治学、国家学というものはありません。中国人には、政治というのは権力闘争、三国志的なドラマだという気持ちが非常に強いようです。

日本の場合は、近代的概念の中で政治とか民主主義、あるいは法律というものをとらえます。これらはすべて国民を保護するもの、国民の福祉になるものと考えます。中国の場合は「帝力何ぞ我にあらんや」ですから、帝力、つまり国家権力によって庶民の生活が良くなるなんてことは、庶民は全然期待していません。

こういう違いが日本人と中国人の間にありますから、日中関係は一衣帯水、子々孫々友好でうまくいくなどと、軽々しく考えてはられません。

最近の日中関係を見てみますと、日本政府には安易な考え方が多分にありました。「中国は鄧小平・胡耀邦体制の改革でうまくいくだろう。日中関係には何ら問題はなく、21世紀は日中友好の時代だ」なんて、さかんに言っていましたね。これは日本と中国が同文同種だという甘えから、なんとなく日本の概念で中国を考えてしまうことがあるからだと思います。

もう一つは、中国というとなんとかロマンチックに考えたいんですね。万里の長城へ行ってみたくとか、シルクロードの遺跡を訪ねてみたいとか。だけどそれと現実の中国社会とは全く違います。

中国社会は日本列島の3.7倍くらいしか人間の住める空間はないわけで、そこに10倍以

上の人間がひしめいているというボルテージの高い社会。日本は国土の70%が緑の森林におおわれていますが、中国はたったの12%です。ですから都市を含めてどこも、ものすごい密集地帯で人々がうごめき、ひしめき合っているわけです。

その中で政治のドラマがある。今年初めの政変は、私が見るところ陳雲らの保守派が改革路線そのものを批判しましたが、本当のところは鄧小平を批判したかったのだらうと思います。だけど鄧小平を批判するのはあまりにもリスクが大きいし、そして、今の中国の政治の舞台にいる人は、すべて文化大革命の犠牲者ですから、あのような混乱は避けたいという、ある種の暗黙の合意が辛うじてあったので、あの程度で済んだのでしょう。だけど今後、鄧小平がどうなるかわかりませんね。

右へ左へと揺れ動く中国の政治を考えると、中国が日本へ向ける顔だけ見て、たとえば中曾根さんのように「家族ぐるみの付き合いをした」なんて言うのは、まったくナンセンスだと思います。日本の宰相たるもの、中国の人たちと家族ぐるみの付き合いをしたなんてことを自慢してはいけません。中国には「君子の交わりは淡きこと水のごとし、小人の交わりは甘きこと體のごとし」という荘子の言葉があります。ですから、家族ぐるみのベッタリした付き合いをするなんていうのは、まさに小人のやることであって、一国の宰相たるものは淡々と付き合っていたかねばいけなかった。

中曾根さんが作った中国問題の一種のコミテーターで、日中21世紀委員会というのがありますが、これの中国側代表は全部、今回失脚した胡耀邦グループで、日本側はこの人たち

とだけ親密にやっていたため、当面对応が難しくなりました。そして案の定、胡耀邦の罪状には「日本と仲良くしすぎた」というのが入っています。

これなどは、やはり異母兄弟としての中国との付き合い方を無視したためだ、と言っていると思います。私は「日中関係は同文同種であるより、異母兄弟だ」ということを昔から申しております。民族的にも文化的にもたしかに同じルーツなんですけれど、現在の日本と中国はあまりにも違いがある。その違いを無視して一体感を感じてしまうのは一種の幻想であって、それに甘えていると、うまくいっている時はいいが、悪くなったら他人以上にその関係は解きほぐし難い。生物でもそうですが、近いもの同士はある一定の距離をおかないといけません。近づき過ぎると拒絶反応を起こします。

日本と中国の関係は歴史的にもそういう宿命にあるわけですから、ある一定の距離をおいておく必要があります。最近のように、中国がなんでも日本に学びたいからといって、「それ行け中国」というのはよくない。こういう時こそ、禁欲してちょうどよいのではないかと思います。

やはり大きい文化の違い

我々の祖先は中国からいろいろな文化を受け継いでおりますが、受け継いだ中にも違いはあります。たとえばお寺。日本のお寺はきわめて静かに枯れた美しさを持っていますが、中国のお寺は異常なまでに極彩色で、いわばサイケデリックな、どぎつい感じのものが目につきます。日本の場合には長い間の武家政治、武家文化の美意識が、おのずと仏教にも影響

しているわけでしょう。

中国の場合、封建社会というのは紀元前に終わっており、あとは皇帝がすべてを所有するといった皇帝型権力になっています。ですから中国には侍というのがいないんです。日本は長い間の封建時代、武家政治の時代を持っていました。その中世から近代、現代、明治維新まで、大きな社会変化の中で中国とは実に違った体質を持っているんですね。

中国では皇帝のそばに文人官僚がいて、その中の大部分は宦官という去勢された男たちでした。ですから権力構造自体が女性的だと思います。その感じが中国のお寺にも出ているのでしょうかね。

お茶にしても中国から入ってきましたが、中国では茶道が生まれなかった。生け花も生まれなかった。やはり美意識が違うからだと思います。

一回限りの出合いを大切にす一期一会という言葉は中国にはありません。そのかわり彼らは女性のように粘液的でしつこくて、一種の耐える思想には長じていると思います。日本人のように「潔い」ということを大切にす思想がない。三島由紀夫の事件は、私がちょうど香港にいたときに起こりましたが、中国人にいくら説明してもわかってもらえませんでした。あのように物事を突き詰めて、一回限りに割り切っていくというようなことは絶対にしません。陰陽二元論ですから。そういう二元的社会と一元的な日本とでは、大きく違っていて当たり前なのです。

中国の場合は、いつも本音と建て前とがあります。日本人をお客として呼ぶとき、関係がいいときでも絶対に本心を明かしませんね。日本人のようになんでもすぐしゃべってしま

うなんてことはない。日本人のように酔っぱらって本音を吐くなんてことは絶対にありません。中国人の酔っぱらいを見たことがあるでしょうか。政治文化が違うわけですから。絶対に彼らは酔って乱れることはありません。

招かれたときにも「はい」といって、すぐそれに応じるのはいかにも日本人です。中国人は建て前で言っているわけで「三顧の礼」という言葉にあるように、3回呼ばれたら初めて応ずればいいんです。そして応じた暁には必ず相手を招き返さなくてははいけません。お客を招くことを中国では「請客」、そして招き返すことを「回請」あるいは「還席」と言います。お客に招かれたら、必ずお返しに招くのが原則であるにもかかわらず、最近の日中関係ではこれがなおざりにされている事例があり、中国側がいらだつのは無理からぬことでしょう。

中国人との交わりは、今申し上げたような異質性、民族の癖、政治文化というようなものを十分考えて、異母兄弟としての付き合い方をきちんとわきまえていかなければいけないと、かねがね思っております。

フランクな気持ちを大切に

日本人は物事をロマンチックに、あるいは自分の期待で考えがちです。ここ数年間というもの、日本の政府や財界は中国に対して非常に甘い幻想を抱いていました。中国はソ連と違ってほしい、日本と仲良くする体質であってほしい、本当は中国が共産主義でなければなおいいが、という憧れと期待があるわけです。

だけど中国は、まぎれもない共産党一党独裁下の革命国家です。そのへんをごく常識的

に考えてみますと、今の鄧小平体制にもいろいろ無理があります。

そもそも資本主義社会というものを根本的に否定する立場にある中国共産党の一方独裁下にありながら、資本主義的要素の良いところだけを導入しようとするのは矛盾ですよね。そんな矛盾がうまく整合されるはずはありません。

もっと卑近なことを言えば、今の鄧小平がどうなるか。彼は党の最高実力者であるかもしれませんが最高権力者ではない。中国共産党は82年の12回党大会で党規約を改正して、主席という言葉をやめて総書記という名前に変え、書記長制、書記局中心にしました。その最高権力者である総書記だったのが胡耀邦です。

この最高権力者を解任するのに、単なる顧問委員会の主任である鄧小平が大きな顔をしているというのはやはり不自然なんですね。このことはやがて問われるのではないかと思います。日本側も甘い幻想ばかりでなく、このようなことを注視しておく必要がありますよ。

中国は長い間、近代化への苦惱の道を歩んできました。毛沢東政治というものを、ついこの間まで熱狂的に崇拝し信じ込んでいました。それが急速に近代化する、資本主義化する、西側化するということはあり得ません。そういう動きが出れば、それを抑えていくでしょう。

中国の1人当たりのGNPが2,000ドルくらいになって、ある種の市民社会的な成熟ができるまでは、当分、中国は今のように右に揺れ左に揺れていくと思います。中国のGNPが2,000ドルになるのは、うまくいって2049年、



21世紀の中頃ですから、そういう前提の中で中国というものを考えていかなければいけません。

中国とは付き合っていかなければいけないわけで、そうするとやはり、留学生のお世話をするとか、地道な日中関係のあり方がいい。相手に恩を売るとか恩をきせるとか、中国が金銭的な負い目を感じるような付き合い方はできるだけ避けたほうがいい。異母兄弟の間というものはそういうものだと思います。本音をはけば、成り上がった弟分などからは借金したくない、というのが中国人の偽らざる気持ちだと思います。フランクな付き合いこそ、逆に感謝されることがあるんじゃないでしょうか。

以上のようなことを申し上げて、日中関係についての私の見方をご披露させていただきました。(於 松山)

中嶋嶺雄氏略歴 昭和11年長野県松本市生まれ。東京外国語大学中国科卒、東京大学大学院(国際関係論)卒。社会学博士。外務省特別研究員(在香港)、オーストラリア国立大、バリ政治学院客員教授などを歴任。現在、東京外国語大学教授(現代中国論、国際関係論)。

著書は『北京烈烈』『現代中国の政治と戦略』『香港』ほか多数。

Family

MAY

1987



5

